「避難」の言葉に込めた意味を超える事態、哲学者・國分功一郎が耳を傾けた震災15年　原発避難者との3時間対話、何度も読み直し「救われた」1冊きっかけに

2026/04/06

47 NEWS

東日本大震災と東京電力福島第1原発事故から15年。福島県では今なお「帰還困難区域」が残り、2万3千人以上が各地で避難を続けている。“復興”のつち音が響く中で長い歳月が流れたが、「原発事故で被害を受け、避難をした人たちの声があまりにも聞こえてこない」と哲学者の國分功一郎さんは話す。

追われるように故郷を離れた避難者たちは今、何を思うのか。原子力問題について考え続けてきた國分さんは「この機会にぜひ、話を聞かせてほしい人たち」が暮らす宇都宮市に向かった。3時間に及ぶ対話を経て、國分さんが言う。「原発事故は、人間の想像力が『避難』という言葉に込めてきた意味をはるかに超えている」（共同通信＝多比良孝司）

▽言葉にならない時、本を手に取った

2月下旬。JR宇都宮駅を降りると、待ち合わせ場所に「栃木避難者母の会」の大山香さん（60）が迎えに来てくれた。

「お久しぶりです」。國分さんのあいさつに、大山さんが笑顔で応える。

交流のきっかけは1冊の本だ。

福島県富岡町で生まれ育ち、震災時は福島市で暮らしていた大山さんは、悩み抜いた末に「自主避難」を決め、家族と共に宇都宮市で暮らし始めた。避難者の訪問支援員として活動を始めると、ぽつん、ぽつんとそれぞれのアパートの部屋で暮らすお年寄りたちがいた。孤立する避難者たちを「なんとかつなげたい」と、2013年に「母の会」を設立した。

ざっくばらんな茶話会、聞き取りを基にした証言集の作成、帰還困難区域の家を巡るスタディーツアー…。同じ苦しみや悩みを共有する活動を地道に続けてきた。怒りや悔しさ、言葉にならない思いが体を駆け巡る時、大山さんはさまざまな本を読むことで「言葉を探してきた」という。事故の記憶の風化が進む中で、今後の活動について悩んでいた際、手に取ったのが國分さんの著書『原子力時代における哲学』（晶文社）だった。

▽何度も読み直し、そのたびに救われた

この本は多くの知識人が雪崩を打つように「原子力の平和利用」を支持した1950年代に、その危険性をただ一人指摘した哲学者マルティン・ハイデッガーの思想に迫る。國分さんは原発事故を予言するかのような彼の言葉を引用する。

＜我々は、この考えることができないほど大きな原子力を、いったいいかなる仕方で制御し、操縦できるのか、そしてまたいかなる仕方で、この途方も

ないエネルギーが――戦争行為によらずとも――突如としてどこかある箇所で檻を破って脱出し、いわば『出奔』し、一切を壊滅に陥れるという危険から人類を守ることができるのか？＞

原子力について根源的に考える一冊に、大山さんは強い感銘を受けたという。

「何度も読み直し、そのたびに救われる思いがしました。もちろん難しくて、分からないところもありますが、自分の傷ついた心に言葉が染み渡った。私のような一般の人にも開かれている本だと思いました」

この本を仲間たちに紹介したい。できるなら直接話を聞きたい。勇気を出して國分さんに手紙を書くと、「ぜひお会いしましょう」と返事が届き、2024年5月に東京大の國分さんの研究室で面談が実現した。

当時のことを國分さんは「本当にありがたくて、びっくりしました」と振り返る。

「普段から哲学の研究者ではない人にも読んでほしいと思って本を書いていますが、それを大山さんたちが読んでくれて、会いにまで来てくれた。この本に最もビビッドに反応をしてくれたのが、原発事故から避難した当事者の方たちだったことに驚くと同時に、本当にうれしかった」

そして、震災から15年という機会に「今度は私が皆さんに会いに行き、お話を伺いたい」と國分さん。「15年というのは恣意的（な区切り）だと思います。でも、恣意的でも何でもいい。話を聞かせてほしい、と」

「栃木避難者母の会」の（左から）大山香さん、半谷八重子さん、小峰和子さんと國分功一郎さん＝2026年2月、宇都宮市

▽自分の中にある町が思い出せない

國分さんの申し出を快諾した大山さんは、「母の会」設立以来の仲間の半谷八重子さん（79）と小峰和子さん（78）に声をかけ、この日、小峰さんの家で4人の対話が実現した。

小峰さんが家族と暮らす宇都宮市郊外の自宅を訪れると、部屋には、原発事故で離れるまで住んでいた福島県浪江町の家の写真が飾られていた。

「2、3日前に全部壊しましたと連絡が来ました」

福島県白河市で生まれ、父親の転勤で小学5年生から浪江町で暮らしてきた小峰さん。同町大堀地区の伝統工芸品「大堀相馬焼」の窯元に嫁ぎ、自身も作陶をしながら畑で野菜を育てる「半陶半農」の穏やかな暮らしは、原発事故を境に激変した。

「数日で戻るつもり」だった故郷は帰還困難区域に指定され、思い出の詰まった家はイノシシに荒らされるなどして「どんどん朽ちていった」。

「家を見に行くたびに、胸が締め付けられました。時間がたつことで変わり果て、私の頭にある町とは別のものになっていく。その姿を見ることで、自分の中の家や町が思い出せなくなっていくのがつらかった」

2023年、大堀地区の窯元などが「特定復興再生拠点区域」として、避難指示が解除されることになった。だが、避難の長期化とともに、年齢を重ね、大病も患った小峰さんは、「戻りたくても戻れない」ジレンマの中で覚悟を決め、家の公費解体を申請した。「取り壊しに立ち会いますか？」と業者に聞かれたが、「目の前で家を壊されるのを見るのはとても耐えられない」と断った。

▽誰のため、どうなれば復興なのか

「悲しいよね。町が元に戻るならすぐにでも飛んで帰るのにね」

小峰さんの横に座った半谷さんが言う。42年間暮らした双葉町の家は、原発から約3キロの距離にあった。宇都宮に避難した後も、半谷さんはたびたび双葉町に通い、家の片付けを続けた。壁には地震の発生時刻の午後2時46分を指したままの時計が掛かっていた。

避難が長期化する中で、家の近くに除染土などを保管する中間貯蔵施設が建設された。「もう住めない」と家の解体の申請はしたものの、業者から「そろそろ解体してもいいですか」と確認の電話が来ると、なかなか首を縦に振れなかった。

片付けに来るたびに家の周囲は更地が増え、かつての町の風景ではなくなっていった。半谷さんの家も、最終的に昨年3月に取り壊しが始まり、秋には更地になった。

「私も小峰さんと同じ気持ちで、行くたびにつらかった。でも、最後はやっぱり見届けようと思って、解体中も何度も出向きました。『原発さえなかったら』と悔しさがこみ上げました。更地になったところを見たら、ああ、こんなに広かったんだって。寂しくてね」

一方、被災したそれぞれの町は、復興の担い手として積極的に移住者を呼び込み、新たな町づくりを進めている。避難指示が解除された浪江町の窯元の中には、地域に戻って活動を再開した人もいる。悩み抜いた上で家の解体を決めた小峰さんだが、そうした活動を見ると「心がザワザワして、避難したままの自分にどこか罪悪感を覚えてしまう」と、複雑な心境を明かした。

「復興、復興って言うけれど、誰のための復興なのか、どうなれば復興なのか。何年か前から分からなくなってきて…」

浪江町の家の写真を眺める小峰和子さん＝2026年2月、宇都宮市

▽「破壊」とは違う「住めない」の重さ

そんな一つ一つのつぶやきを聞き逃さぬよう、ノートにペンを走らせていた國分さんが語り始める。

「僕の父親は福島県の本宮町の出身なんです。今は千葉に住んでいますが、その父が事故の後に『福島がなくなっちゃうんじゃないか…』と言ったことがありました」

國分さんが震災当時から考え続けているのが、「破壊」とは全く性質の異なる、「その土地に住めなくなる」という事態をもたらした原発事故の重大さだ。

「破壊されることもつらく、悲しいことですが、それでも同じ場所に何かを作り、新しく始めることはできる。でも原発事故では『避難しなさい』と言われ、その土地に戻りたくても戻れないまま長い時間が過ぎた。皆さんのお話を聞いていると、15年前の問題が今もそのまま、それぞれの中にあると感じます」

小峰さんが自身の胸を指さし、言葉をつないだ。「苦しさも悲しさも、常にここにあって、決して消えることはないんだよね」

▽「避難者が消滅させられる」

國分さんが「避難した人たちの声が全然聞こえてこないし、みんなの意識からも遠ざかっている」と実感を伝えると、半谷さんは「だんだん（社会の関心が）薄れて、忘れ去られてきているよね」と率直な思いを口にした。

大山さんは、そんな現状を「避難者が消滅させられる」と表現した。

「母の会」の活動では、当初から「賠償金をもらっているだろう」「今まで原発の恩恵を受けていたのだから仕方がない」といった誹謗中傷やバッシングが聞こえてきた。一方で「いつまで引きずっているの？　事故は忘れて、今の生活を楽しめばいい」といった支援者らの善意の言葉に傷つく人もいた。

また、同じ避難者の間でも「強制避難」と「自主避難」の違いで感情的な摩擦があり、分断や隔たりを感じる場面もあったという。そうしたさまざまな要因による「精神的な痛み」は、時を経て解決するどころか、より深まっている。だからこそ、避難者が声を上げづらく、口を閉ざすようになっている。「原子力の平和利用による事故は一瞬ですが、個人の生活はかき消され、世代を超えて影響が出る。そして、それを誰も責任を取らない構造になっているんです」と大山さんは言う。

原発の再稼働やそれに向かう動きが各地で加速している。3時間近くに及んだ対話で語られたのは、原発事故によって故郷を奪われたことの今も続く苦しみと悲しみ、そして、それぞれの立場によっても、時期によっても変わる、複雑で多様な故郷への思いだ。最後に、國分さんは3人にこう伝えた。

「今日伺ったお話は僕の中でずっと大事なものとして残っていくと思います。自分の仕事にどう生かせるかは分かりませんが、それを少しでも言葉で伝えていけたら」

【國分功一郎さんインタビュー】

（宇都宮から東京に戻った國分さんに対話を振り返ってもらった）

どんなことを伺おう、何を質問しようといろいろ考えていたのですが、実際には、僕は3人のお話をずっと聞いていて、ほとんどしゃべりませんでした。そ

のぐらい重みのある話で、僕の体が自然と「耳を傾ける」状態になっていったのだと思います。

話を聞きながら「避難」とは何だろうと考えていました。避難という言葉は、ある厄災を何とか乗り越えて、また元に戻ることを前提にしていると思います。しかし、原発事故は人間の想像力が避難という言葉に込めてきた意味をはるかに超える事態でした。だから、本当は（この状況を表す）言葉がないのです。そのことを受け止めずに「避難」「避難者」と一様に論じるのはものすごく乱暴だと思います。

哲学者のハンナ・アーレントは、その人の性別や国籍といった情報である「何（what）」と、単なる情報に還元できない固有性である「誰（who）」を区別し、その話に「耳を傾ける」ことで、「何」ではなく「誰」が伝わってくると言います。私たちは、その「誰」が感じられた時に、そこにどんな人がいて、どう考え、どう行動したのかを、具体的に想像力を働かせて、受け取ることができる。そうやって耳を傾けることをやめてしまえば、震災も原発事故も「2011年3月にこういうことがあった」という情報しか残らなくなってしまう。そのことを僕は恐ろしいと思います。

15年たってもなお、耳を傾けるということ。どんな人がこの恐るべき事故の中で耐えてきたのか、それを全部知ることもできないし、全部想像することもできないけれど、僕はこういう形でお話を伺うことができて、そのきっかけをいただけた。この記事が、そういうきっかけの一つになれたらと思っています。

© 一般社団法人共同通信社